

ミャンマー軍政 母国の家族は：

クーデター4カ月 管内実習生 募る不安

ミャンマーで2月に国軍によるクーデターが発生して1日で4カ月。不安定な

情勢が続く、オホーツク管内に住むミャンマー人も不安を募らせている。北見市で外国人技能実習生として働く2人のミャンマー人は「家族にお金を送ることもできず、これからどうなるか」と心配している。

北見市東相内町の介護老人保健施設「いきいき」の実習生、エイ・エイ・ネインさん(21)は首都ネピドー出身。昨年2月に来日し、

母国に残した家族を心配するミャンマー人技能実習生のエイ・エイ・ネインさん(左)とエイ・エイ・トゥウエさん

(岩崎勝撮影)

同3月から働き始めた。

クーデター発生当初、母国で暮らす5人の家族に連絡し、無事を確認した。その後、インターネットや電話がつながらなくなり、不安でよく眠れなかった。5月中旬、ようやく連絡を取ることができ、「父親は運転手の仕事ができている」と聞いた。

家族は在日ミャンマー人によるデモ活動のことを知っており、エイさんに「顔が(テレビなどに)映ったらまずい。デモに参加しないで」と懇願したという。軍に知られ、国内にとどまる自分たちや帰国後のエイ

さん本人に危害が及ばないか懸念してのことだった。

同じ施設で働く実習生のエイ・エイ・トゥウエさん(29)は北部の農村出身。5人の家族を残し、昨年11月に来日した。姉と兄は公務員で、軍に抗議してストライキをしているという。

現地の金融機関がストンプした影響で、2人は送金できず、家族の生活状況への心配も尽きない。2人は「軍政下では自分の考えを自由に言うことができない。アウン・サン・スーチーさんを解放してほしい」と話している。

(朝生樹)

